

『今月の天候と農作業』

通巻第5669号
11月号
令和4年10月3日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすい時期があるため、平年並か高いでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 11月5日(土)～ 11月11日(金)

気圧の谷や湿った空気の影響を受ける時期もありますが、高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 11月12日(土)～ 11月18日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 11月19日(土)～ 12月02日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆大豆

収穫と乾燥

収穫時に大豆の青立ち株や雑草が混ざると茎汁による汚損粒やカメムシ類による被害粒の原因となるため、事前に抜き取りを実施しましょう。

成熟期は、完全に落葉し、莢がカラカラと音がする頃です。コンバインでの収穫適期は、さらに10日程過ぎて、枝がポキポキ折れる時が目安で、茎水分の高い早朝は避けましょう。

乾燥作業では、高温ではしわや皮切れを起こすため設定温度を30度以下にします。

◆ソバ

収穫と乾燥

バインダーや手刈りでの収穫は、子実の7～8割が黒変した頃の朝夕に行い、10日程島立てし、子実が粉状になるまで乾燥します。

コンバインでは、8～9割が黒変した頃に行い、30℃以下の温度で乾燥させます。その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きます。

◆麦類

一 ほ場の準備

排水良好な圃場を選び、碎土は丁寧に行います。麦は酸性土壌に弱いため、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は1t程度で、基肥は地区基準を参考に施用します。

二 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行います。播種は、山間部では11月中旬、沿海部では同下旬から12月始め頃に行い、ほ場周囲や3～5m間隔に溝を掘るなど、湿害対策を徹底しましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆施設野菜全般

11月末までは寒暖の差が大きいため、夕方早くに内張ビニルを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。そのため最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。また、比較的低温で管理する作物は、夜温が下がらない場合、内張ビニルを閉める時間を遅くするなど、状況に応じた管理を行います。

◆きゅうり

促成きゅうりは、主枝から側枝の収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが大切です。かん水は果実肥大に合わせて、量を少量にして回数を多くします。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量が多くなり、着果負担が増加するため、草勢低下に留意して適期収穫を心掛けましょう。また、草勢維持のために果実の着果状況に応じてかん水、施肥管理を行いながら、収穫が終わった懐枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培は収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水量や追肥量を調整します。また、極端に草勢低下が見受けられる場合は、摘果を行いながら、草勢維持を図りましょう。

◆いちご

日中に施設内温度が高く、追肥の量が多い場合に、チップバーンによるがく枯れが発生しやすくなるため注意しましょう。また、電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2時間30分、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで時間あたり5分間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行いましょう。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期です。地上部の生育が悪かったほ場や収穫が遅れたほ場、雨天後に収穫したいものは貯蔵性が劣るため、長期貯蔵は避けましょう。

翌年の種いもは、健全に見える種いもでも、病害発生ほ場から採取したいもでは感染が確認されるため、病害が発生したほ場からは取らないようにしましょう。

貯蔵中は温度13℃、湿度90%となるようにこまめにチェックして管理します。収穫直後のいもは呼吸量が大きく、一度に大量に入庫すると萌芽や結露が発生する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用しましょう。また、空調設備がない場合は貯蔵適温の時間帯に換気をして除湿しましょう。

貯蔵中に腐敗したいもは隣接いもを腐敗させるため、すぐに取り除きましょう。

◆さといも

翌年の種いもは優良なものだけを子いもが離れないように株毎に茎部を下にして保管します。ほ場で据置きする場合は、低温障害を受けないよう、厚めに培土しましょう。

◆収穫後の片付け（次作に向けて）

各種病害の伝染環を絶つため、さといもやかんしょ等の収穫が終わったほ場は速やかに片付けます。残さは可能な限りほ場外に持ち出し、持ち出せない残さはトラクターで細かく破碎します。ほ場や畦畔等に残さを放棄しないようにしましょう。無発病のほ場や種いも採取用のほ場に入る時は、病気や線虫の伝染を防ぐため、長靴や農機具は洗浄してから使いましょう。

◆たまねぎ

定植時期です。植付けの深さは3 cm程度とします。深植えすると収穫時に縦長球（レモン球）が多くなるため注意が必要です。植付け後3～5日間は株元にかん水を行い活着を促しましょう。

（川崎 佳栄）

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

秋肥を施用する時期です。秋肥の効果を十分に高めるためには、樹体に肥料が吸収される12℃以上の地温が必要です。また、年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が、翌年の花芽充実に有効とされています。これから気温や地温が低下する時期となるため、11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆ 日向夏の落果防止

日向夏は土壤の乾燥や施肥不足等により、秋から冬の落果が助長されます。落果防止剤を11～12月に散布しましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は2番果、3番果の結果が中心となっている園が多くなっています。既に十分な肥大が確保されている園では、着色に向けて昼温が高くなりすぎないように管理します。肥大不足の園では、秋季加温を継続しましょう（昼間の温度は28℃、夜間は外気温+3℃を目安とします）。

◆ マンゴー

早期出荷作型では花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度に抑え、夜間の最低温度は6～8℃程度を維持します。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。5割程度の出蕾を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に上げていきます。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉や子房の形成不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を助長します。できるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生長させましょう。

2 果樹園共通

冬期には防風林や防風ネットの整備を行います。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように枝を整理します。防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

（鈴木 美里）

花き

◆キク

気温の低下に伴い植物体が結露しやすくなり、白さび病の発生リスクが高まるため、曇雨天時は送風を行うなど、結露防止に努めましょう。

年末出荷作型は摘蕾期です。花のボリュームを出すために、摘蕾作業は適期に行いましょう。

◆スイートピー

採花開始時期です。

樹勢を安定させ着花を促すため、徐々にかん水を控えるようにしましょう。

また、曇雨天後に晴天が予想される場合は、成長点や葉の焼けを防止するため、カルシウム剤の葉面散布などの対策を取りながら、必要に応じて遮光を行いましょう。

夜間の加温が必要な時期となるため、早めにダクトを設置しましょう。また、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を併せて開始しましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を葉面散布して茎の硬化を図るとともに、収穫後は適切な前処理を行うことで花落ちを防止しましょう。

また、2番花のロゼットを回避するため、1番花の花穂伸長終了時から電照を開始しましょう。

◆トルコギキョウ

過剰施肥や曇雨天はブラスチングの発生要因となるため、追肥は生育状況に応じ、発蕾前に終えるようにしましょう。

一方、10月定植株は葉先枯れ症状が発生しやすい時期となります。徐々にかん水を控えて根域を広げるとともに、適宜カルシウム剤を施用しましょう。

◆ラナンキュラス

気温及び地温が低下してきます。徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図りましょう。

夜間の加温が必要になるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を併せて開始しましょう。

（山塚 裕美）

畜産

◆家畜防疫対策

今年は、国内で例年よりかなり早い9月25日に死亡野鳥から高病原性鳥インフルエンザが確認されており、感染リスクが高まっています。

これらの法定伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

今月は朝晩の冷え込みが厳しい時期に入りますので、こまめにカーテンを開閉するなど、畜舎内の温湿度環境に注意しましょう。また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温機材を点検整備し、保温箱や風よけ等の寒冷対策の準備を行いましょう。

牛では、飼料作物の収穫と作付けなど農繁期となるため、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されます。朝夕の観察を徹底しましょう。

◆飼料作物

飼料用稲、トウモロコシ（二期作・遅まき）、ソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン、エン麦などの作付け時期が重なる時期です。飼養管理に影響が出ないように計画的に作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。

（小田 弥生）

特用作物

◆茶

1 寒害・凍害防止対策

近年は暖冬傾向で茶樹の耐寒性獲得が遅れる傾向にあります。耐寒性の弱い早生品種（さえみどり等）や中切りしたやぶきた等では、秋冬期の急激な低温により茶芽が凍害を受け、芽つぶれを起こす場合があります。防霜ファンやスプリンクラーを用いた秋冬期の防霜対策を検討しましょう。

また、幼木園での敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけうね間中央に寄せるようにします。万一、幹割れが発生した際は、速やかに株元へ土寄せを行いましょう。

2 害虫の防除

一番茶前のカンザワハダニの密度増加を抑えるためには、整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。専用ノズルを用いて、飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら、散布しましょう。

また、県内茶園ではチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。マシン油乳剤によるカンザワハダニとの同時防除を行いましょう。

（竹田 博文）

◆しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施します。クヌギやコナラの場合、葉が3～7割程度黄葉する11月下旬頃までが、伐採に適しており、樹皮の剥がれにくいほだ木となります。良いほだ木づくりのため、適期伐採を心がけます。

また、伐採後は葉枯らし乾燥を40～60日程度実施します。

2 発生操作

ほだ起こし作業は、一般的に10月～1月に行いますが、品種によって発生温度帯が異なるため、品種の特性を十分に理解して作業時期を決めます。また、ほだ起こし後に散水を必要とする品種や、水分供給を遮断して抑制を必要とする品種がありますので、使用品種の特性に合った管理を行います。

ほだ起こし作業の際、長時間直射日光に当てるとほだ木が痛むので、作業は曇天の日か朝夕の日差しの弱い時期に行うほか、作業時には樹皮を傷つけないよう注意しましょう。

なお、風が強く吹き込むほだ場は乾燥によってしいたけの生育が不良になったり、変形しやすくなるので、防風ネット等を設けると良いです。

（堀川 和也）

◆たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 耕種的防除

葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の土壌伝染性病害の菌密度の低下と土壌消毒の効果向上させるため、冬期耕耘を10日おきに3回以上行いましょう。

2 耕作ほ地の土壌改良

耕作予定ほ地の土づくりのため、石灰・ようりん等の散布を行い土壌改良に努めましょう。

石灰散布をする場合は、石灰に消毒剤の成分が吸着され、効果が半減するので消毒処理1ヶ月後に散布しましょう。

3 農薬の適正使用

土壌消毒を実施する際には、薬害・公害のないよう十分注意し、農薬使用基準に則って土壌水分が60%程度（軽く握った時に割れ目が二～三個できる程度）の時期を選んで実施しましょう。

今年の販売時、塩素グレーによる品質低下が目立ちました。使用量、時期を確実に守り、塩素グレー発生防止を図りましょう。また、土壌消毒剤の空缶は、地域で決められた方法で適切に処理しましょう。

4 完熟堆肥の確保

良質堆肥（10アール当たり1200kg以上）施用に向けて、材料を十分に確保し、未熟堆肥投入を避けるために水分60%程度保ちながら月に1回程度切り返しを行い、堆肥の腐熟促進を図りましょう。また、塩素グレー発生防止のため脱塩した堆肥を使用しましょう。

5 貯蔵害虫対策

販売終了後は、乾燥室・貯蔵庫・作業場の清掃を徹底しましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	並	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	ハスモンヨトウ	並	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	並	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病 (MYSV)	並	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)の発生が各地で確認されています。感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封するなど適切に処分します。
	タバココナジラミ	やや多	キュウリ退緑黄化病を伝搬するので、施設内への飛び込みを防止し増殖しないよう防除を行います。薬剤散布後は防除効果を確認し不十分な場合は、異なる系統の殺虫剤による追加防除を行います。
冬春ピーマン	斑点病	並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。 黒枯病は、多湿条件で発病しやすいので排水を良好にするとともに、マルチの利用、日中の換気を行います。
	うどんこ病	並	
	黒枯病	並	
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ	やや多 やや多	各地でアザミウマ類の発生がやや多くなっています。 ミナミキイロアザミウマは10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。 ヒラズハナアザミウマも早めに防除し、密度の抑制に努めます。 両種とも青色粘着板(300~500枚/10a)による誘殺に取り組み、生息密度を抑制します。
冬春トマト	葉かび病	並	どちらも多湿条件下で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。また、多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。
	すすかび病	並	
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバココナジラミ	並 やや多	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミによって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封するなど適切に処分します。
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。 各地で炭疽病の発生が多くなっています。多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	並	
	ハダニ類 アブラムシ類	並 並	寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。ハダニ類は天敵カブリダニによる防除を実施します。
かんきつ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	並	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	並	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要です。この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きくなります。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

